

國分正胤先生への感謝と追憶

池田 尚治*

國分正胤先生は昭和25年(1950年)から昭和49年まで、東京大学工学部教授として24年間にわたりわが国のコンクリート工学の頂点に立って教育と研究とに取り組まれました。東京大学を定年御退官後は、引き続き武蔵工業大学の教授として、教育と研究を10年間実施されました。その後は、水道橋駅近くにコンクリート研究会という名のオフィスを構えられ、引き続き学界、業界および後進の指導にあたってこられました。10数年間にわたってのコンクリート研究会の主宰の後は御自宅で老後を楽しんでおられました。今年7月7日に御逝去されました。コンクリート学界に計り知れない御業績を残されての90才の御生涯でした。

國分正胤先生は昭和11年に東京帝国大学工学部土木工学科を御卒業後、直ちに東京府土木部に勤務されました。昭和18年に東京帝国大学助教授に任ぜられ、昭和24年に工学博士の学位を授与されました。第二次世界大戦中は陸軍に召集され、一度目は満州へ、二度目はフィリピンへと出征されましたが終戦の時は、国内の飛行場設営工事を担当されておられたとお聞きしました。お若い時の軍隊での生活が余程印象に残っておられた御様子で、多くの機会に軍隊での御生活のことを話しておられました。大学での卒業論文の指導教官は田中 豊先生で、テーマは橋梁に関することと言っておられました。九州帝国大学より吉田徳次郎先生が東京帝国大学に戻られてから吉田先生の助教授として迎えられた経緯については知られておりませんが、おそらく田中 豊先生と吉田徳次郎先生との間での話し合いがあったものと推測されます。國分先生の御専門は、コンクリート工学、鉄筋コンクリート工学、およびプレストレストコ

ンクリート工学で、初期における御研究をまとめられた学位論文「新旧コンクリートの打継目に関する研究」によって、昭和25年度の土木学会賞を受けられました。先生の御活動のなかで特筆すべきことは、吉田徳次郎先生の後を継がれて、昭和36年より土木学会コンクリート委員会委員長に就任され、以来わが国の土木工学分野におけるコンクリート工学の最高指導者として、内外に御活躍されたことです。この間、コンクリート標準示方書や、プレストレストコンクリート設計施工指針などの制定に心血を注がれました。先生の教育、研究や学協会活動などに関する御業績は数かぎりないですが、そのなかで、とくにわれわれ後輩が多量の恩恵を受けたものは次に示すとおりです。

(a) 土木学賞のなかに吉田賞を創設され、含めて吉田研究奨励金の制度をつくられたこと。

(吉田賞は吉田徳次郎先生の御他界を機に吉田先生の御業績を永く後世に伝えるために基金を募って設立されたもの)

(b) 現在の日本コンクリート工学協会の設立に中心的な役割を果たされたこと。

(c) アメリカコンクリート学会(ACI)との交流を中心的に果され、当初、日本ACIを組織されたことが契機となって、日本コンクリート会議を経て現在の日本コンクリート工学協会への発展へ尽力されたこと。また、日米科学セミナーを推進され、日米のコンクリート技術や研究者の交流に尽力されたこと。

(d) 国際構造工学協会(IABSE)に積極的に参画され、副会長の要職を務められるとともにわが国の構造工学の成果を広く世界に広められたこと。

以上のほか、土木学会会長や日本学士院会員として、大所高所からわれわれを御指導下さいまし

* Shoji IKEDA : 本協会顧問 横浜国立大学 名誉教授 (特) 複合研究機構 代表取締役

た。

さて、筆者は東京大学教養学部において、昭和32年にはじめて國分先生からコンクリートについての講義を受けました。その後、工学部へ進学してからは、鉄筋コンクリートとプレストレストコンクリートについて、大学院修士課程まで教えを受けました。文字どおり手ほどきを受けたこととなります。筆者がお教えを受けたことは実に山ほどありますが、そのなかで先生が途方もなく偉い先生であると感じたことがあり、今でもそのときの気持ちを持ち続けていることがあります。それは吉田徳次郎先生が他界されたときに吉田先生の遺言的な御希望に基づいて、吉田先生のお墓をコンクリートで造るということでした。その時國分先生は、大変御多忙な時にもかかわらず、各地の墓地を調査され、その結果として次のような判断をされました。

「お墓は永く残るものであり、すべてをコンクリートで造ることは困難である。墓石だけは石材とせざるを得ない」ということでした。当時、吉田先生の御研究で圧縮強度が100 MPaのコンクリートがすでに製造可能であったにもかかわらず、墓石は石材で造らざるを得ないとの御判断は、筆者のような凡人ではとてもできることではないと思ひ感嘆致しました。

大学院での授業では、Hognestadの終局強度理論の講義や、PC梁の弾性挙動実験などが昨日のことのように思い出されますが、筆者としては、卒業論文、修士論文および博士論文の懇切丁寧な御指導をいただくとともに、首都高速道路公団から東

京都立大学への転職、ACIフェロー会員への推挙などかぎりなくお世話になりました。國分先生御夫妻には筆者夫婦の仲人の役もお願いしたり、ゴルフを数十回も御一緒させていただいたり思い出はつきません。筆者が学位論文に取り組んでいたときは、何回も先生は筆者をゴルフに招待して下さいました。筆者も教育者のはしくれでしたが、とてもここまでは真似のできることはありませんでした。

國分先生とPC技術協会とのかかわり合いとしては昭和38年から40年まで理事・副会長を務められました。平成6年には、PC技術協会の名誉会員に推挙され、多年の御業績に謝意が表されました。なお、たまたまこのとき筆者が会長であったので、恩師に名誉会員の証状をお渡しすることができ、法外な幸せを感じました。

國分先生に長い期間御指導をいただいて感じたことは、先生はつねに自分のことでなくわれわれ他人のことを考えておられたということでした。国際会議などで写真をたくさん写されましたが、その理由のひとつに、外国人の名前をおぼえる手段とされ、次の会議のときに名前をおぼえておくため御努力をされていたのです。筆者を含めて実に多くの後輩が、國分先生から多大な御恩を受けました。心から感謝の意を表するとともに謹んで御冥福をお祈り致します。

なお、土木学会から平成5年に「吉田徳治郎先生の御遺徳を偲んで」という出版物が出されましたが、これは國分先生が御心を込めて出版されたものです。是非御参照いただきたいと存じます。